

金工家・海野勝珉の研究 —教育者としての側面を中心に—

石黒 美男*

A Study on the Metalworker Shomin Unno: Focusing on His Contributions as an Educator

Yoshio ISHIGURO

要旨 明治から大正初期にかけて活躍した金工家・海野勝珉（1844（天保15）年～1915（大正4）年）について、かつて筆者は、年譜を作成し、諸記録を通して人間像に迫り、作品及び下絵から表現の特色をまとめた¹⁾。しかし、彼の生きざまについて理解を深めるためには、創作活動を精神的・経済的に支えた人物や教育者としての事績についても詳らかにする必要があると考えた。そこで、本稿ではまず、彼の修業時代に触れた上で、友人や囑品家との交流について探り、さらに、東京美術学校並びに私工房における指導内容を調査し、彼の後進育成について考究した。

キーワード：海野勝珉 金属工芸 彫金 東京美術学校 帝室技芸員

I はじめに

近年、制度や価値観が激変した幕末から明治を強靱な精神力と旺盛な行動力で生き抜いた人々にスポットが当てられている。金工界において新たな時代を築いた代表的な人物は、海野勝珉（1844（天保15）年～1915（大正4）年）である。

1915（大正4）年10月9日付『東京日日新聞』の勝珉死亡記事には、彼の人柄を簡明に示す彫金家・塚田秀鏡（1848（嘉永1）年～1918（大正7）年）による下記の談話が掲載されている。

翁は腰元彫から明治大正の金工界の全盛を見るに至る迄絶えず努力された一人です加納先生は京都が^(ママ)ら上京して美術学校を始めた人ですが公立となる時に翁を聘した翁は水戸派の

人であつたけれど知遇に感じて一家を成してゐ乍ら加納先生の門に入つた私はこの人格に服してゐた一人です弟子を愛した人で今日一家を成せる者七八人、其数は非常なものです、弟子運のよい人ですが夫れも人格の反映でせう江戸ツ子風の宵越の金を持たぬ人でした、（後略）

秀鏡の言葉からは、勝珉の制作に対する真摯な姿勢と広い度量を読み取ることができる。

勝珉は、社会の変化を敏感に察知し、従来の刀装具に代わる彫金の新たな可能性を探究することにより、廃藩置県（1871（明治4）年）や廃刀令（1876（明治9）年）による逆境を克服したが、近代の工芸界において偉大な足跡を残すことができた要因としては、創作活動を精神的・経済的に支えた人物との出会いも少なからず関係しているものと思われる。そこで、本稿ではまず、彼の修

* いしぐろ よしお 文教大学教育学部学校教育課程美術専修

業時代に触れた上で、友人や囑品家との交流について探ることとする。また、彼の功績について理解を深めるためには、明治の金工界を強力に牽引した教育者としての側面についても詳らかにしなければならない。そこで、東京美術学校並びに私工房における指導内容を調査することにより、彼の後進育成に迫る。

本研究で工芸家の歩みの一端を解明することにより、混沌とした現代において、人々が主体的に生きていくための手掛かりを掴みたいと考える。

II 修業時代

勝珉の幼少期において、筆者が最も深い関心を寄せているのは、2人の師匠の下で刀装金工の諸技法を修得したという点である。

国立公文書館所蔵の公文書『東京美術学校教授海野勝珉』、1915（大正4）年10月7日中の履歴書によると、1844（天保15）年5月15日、常陸国茨城郡水戸下市肴町で生まれた勝珉は、当初、伯父・初代海野美盛（1808（文化5）年～1862（文久2）年）に1852（嘉永5）年から4年間彫金を学び、続いて、萩谷勝平（1804（文化1）年～1886（明治19）年）に11年間師事した。修業の途中で師が変わったことについて、勝珉の仕事を詳細に知る人物の1人で甥の2代海野美盛（1864（元治1）年～1919（大正8）年）は、「故帝室技芸員海野勝珉先生」、『書画骨董雑誌 第90号』、書画骨董雑誌社、1915（大正4）年、2～10頁で、「伯父²⁾は思ふ所あつて當時水戸彫金界の泰斗萩谷勝平氏に依頼して其の弟子とした。」と述べている。

加えて船越春秀、『日本の彫金 その歴史と伝承技術』、三彩社、1974（昭和49）年の40頁には、勝珉が水戸藩お抱えの鎚金師・明珍紀義臣から鍛造を学んだことが記されている。さらに、彼は漢籍を武庄次郎、絵画を足立梅溪に習うことにより、多様な画題に対応できる豊かな教養と写実的な描写力も身に付けた。

通常の1.5倍にも及ぶ15年間の修業を終え、勝

珉は1867（慶応3）年に水戸で独立開業し³⁾、翌1868（慶応4、明治1）年に満24歳で人生最大の転機となる上京を果たした⁴⁾。

III 創作活動を支えた人々

1 精神面

(1) 「植梅」の妻

2代美盛、「故帝室技芸員海野勝珉先生」には、明治初期の次のエピソードが紹介されている。

（前略）団子坂に植梅⁵⁾と称する植木屋あり其處の女将が常盤津の師匠をして居つたので、先生も水戸に於て常盤津を学んだことがある處から親しく交際して居つたが、同家の主人が先生の昨今の窮状を見て同情に堪えず、恰も新富座にて常盤津語りが入用だと云ふので、先生に月十五圓づゝ出すから出勤してはどうかと薦めた。然るに同家の女将は先生の手腕の凡ならざるを知つてか、海野さんは彫金で出世する方が身の為めであらうと云つて反対した。それで先生も遂に新富座に出勤しなかつたが、是亦當時先生が常盤津語りとなつて居つたならば何うであらう。（後略）

上京後間もなく勝珉は、英蘭齋五翁、『東京諸先生高名方獨案内』⁶⁾、1870（明治3）年冬号に「彫工 駒込タンコ坂 海野基平」と掲載され、早くも頭角を現したが、維新の煽りで生活は苦しく、実兄・青龍軒真田義政（本名・幸次郎、号・静国、?～1878（明治11）年）が経営する浅草馬道の鰻屋で出前持ちをして糊口を凌いでいた。それでも、小石川指ヶ谷町の雁金守親から花鳥類の彫刻を学んで研鑽を積み、1877（明治10）年には第1回内国勸業博覧会に「神代人物、袋物前錠」を出品し、褒状を授与された。たとえ「植梅」の妻が反対しなくても、それ程までに強い意志の持ち主が転業するとは考えにくいだが、才能の開花を期待する彼女の言葉が、勝珉の心を励まし、更なる奮起を促したことは想像に難くない。

(2) 4代出羽ノ海運右衛門

2代美盛、前掲書には、1877（明治10）年当時の、4代出羽ノ海運右衛門（常陸山虎吉、1850（嘉永3）年～1915（大正4）年）との興味深い下記の逸話も紹介されている。

先生は角力が至つて好きで殊に常陸山を最頂にし常陸山会の幹事をして居つた程であるがそれには深い原因があるのである。明治十年の頃、前述の如く彫金界が閑散にして先生の最も窮乏を極めし時、先生一日漂然として柳原土手を歩むで居ると、去る十一月一日に死去せる先代出羽海が先方から来たのに遇つた。俱に水戸出身で郷里に居る頃から相識の間であつたので、種々物語の末、先生は出羽海に向ひ、虎さん、私もお前も今は斯うして羽織も着られずに居るが、私は之から日本の彫金界に此人ありと云はれる人になる心算だから、お前も有名な関取になつて呉れと語り、互に微笑して別れたとのことであつた。然るに果せる哉虎さんの出羽海は遂に前頭の筆頭迄昇り且つ横綱常陸山を弟子として明治の角界に名を売つたが、先生亦今日の盛名を博して而も僅か一ヶ月の差を以て此は十月五日⁷⁾ 彼は十一月一日、共に殆んど同時に他界の人となつたが、思へば何かに因縁のやうな気もする。

その後の2人の交流については未詳である⁸⁾が、この話は、道こそ異なるものの、互いに向上しようとする友の存在がいかに大切であることを物語っている。

2 経済面

(1) 若松竹次郎

幕藩体制の崩壊により武士の庇護を失った工芸家にとって、制作の依頼や作品の販売、展覧会への出品を精力的に行う嘱品家は重要な存在であった。彼等は、美術品の輸出により外貨を獲得する

ことで国家に貢献すると共に、皇室や政府からの受注を通して工芸家の社会的地位を向上させた。

これまでに筆者が確認した記録で、勝珉が請け負った最も初期の嘱品家は、若松（屋）竹次（二郎）である。東京府勸業課編、『東京名工鑑』、有鄰堂、1879（明治12）年によると、彼は東京市日本橋区村松町に居住し、勝珉（173～174頁）以外にも真田義政（174～175頁）、大川貞幹（1828（文政11）年～？）（164～165頁）、一柳友寿（本名・平野卯之吉、1831（天保2）年～1889（明治22）年）（162～164頁）、一柳軒寿光（本名・平野寅吉）（182～183頁）といった多数の水戸出身の彫金家に嘱託していた。

勝珉は、若松の委嘱により袋物金具等を製造することで廃業の危機を乗り越え、さらに工芸家の登竜門である内国勸業博覧会（第1回、第2回（1881（明治14）年））で褒状を授与された。

(2) 林九兵衛

横溝廣子編著、『海野勝珉下絵・資料集 東京芸術大学大学美術館所蔵』、東方出版、2007（平成19）年、146～149頁の「海野勝珉賞状一覧」には、同美術館蔵、「海野家資料」に収められている彼の賞状のリストが掲載されている。そこには展覧会名、作品名、賞名等と共に出品者（嘱品家）の氏名が記されている。

その中には、現在も営業を続けている銀座の老舗・天賞堂の2代江澤金五郎（幼名・増次郎⁹⁾）や宮本商行の創業者・宮本勝¹⁰⁾も存在するが、ここでは同資料に登場する嘱品家の内、最も初期（1890（明治23）年～1896（明治29）年）に11点もの作品を勝珉に依頼した林九兵衛（1858（安政5）年～？）を取り上げることにする。

彼の事績については、木下敬正編、『勸業功績録 第一編』、忠愛新聞社、1903（明治36）年、91～97頁に詳述されている。それによると、彼は東京市日本橋区室町2丁目12番地の漆器店・木屋本店の主人であり、塗り物以外にも美術工芸品、金属彫刻物の製造販売及び内外銘木業を営ん

でいた。彼は、明治維新後における欧米各国の本邦美術に対する需要の高まりに伴う粗悪品の増加に憤りを感じ、諸方の美術家を奨励して優美で精巧な作品を制作させ、内国勸業博覧会や日本美術協会美術展覧会等に出品した。この積極的な取り組みからは、海外における日本固有の美術に対する信用を回復し、声価を高めなければならないという勝珉と共通の堅い信念を感じ取れる。

なお、2代美盛、前掲書には、林の後援により勝珉が制作した「蘭陵王置物」（宮内庁三の丸尚蔵館蔵）¹¹⁾、¹²⁾が1890（明治23）年開催の第3回内国勸業博覧会で最高賞の1等妙技賞を受賞した際に、一夕芝紅葉館に美術界知名の士を多数招待して盛宴を催し、勝珉を天下に紹介したことが記されている。勝珉は、本作により金字塔を打ち立て、その直後、東京美術学校雇の職に就くことができた。そのことを考えると、林もまた勝珉の恩人といえよう。

（3）光村利藻

実業家・光村利藻（1901（明治34）年、神戸に関西写真製版印刷（後、光村印刷）を創立、1877（明治10）年～1955（昭和30）年）も、勝珉と関わりの深い人物である。彼は、刀剣蒐集の趣味を持っていたため、彫金家との交流が盛んであったが、取り分け勝珉を重んじ、多数の仕事に依頼した¹³⁾。

光村の生涯については、増尾信之編、『光村利藻伝』、光村原色版印刷所、1964（昭和39）年に詳述されている。本書の453～459頁には光村の随筆「明治金工」が収録され、勝珉について、「自分は同氏の技術に傾倒し、当時現存せし金工中もっとも多く作品を委嘱したり。」と述べ、数々の作品を紹介している。

その内、「大森彦七鬼女を負う図鏝」（鉄角形金銀色絵高彫）は、腰元彫の衰退を食い止め、技術保存を図る目的で、光村が奈良利寿（1667（寛文7）年～1736（元文1）年）の原作を勝珉に模刻させたものである。

一方、「地獄図鏝」（烏金金銀色絵）と「羅漢図鏝」（黄銅金銀色絵高彫）は、通常より大型で、当初12枚組になる予定であったが、光村の事業の挫折と勝珉の長逝により企画半ばで中止となった。これらについては、桑原羊次郎が、『日本装剣金工史』、荻原星文館、1941（昭和16）年の508頁で次のように述べている。

勝珉氏の傑作として世に名高き物は、前記蘭陵王の置物、及び光村氏の依頼に應じて製作せられたる、地獄極楽図銅鏝及び羅漢図の鐵鏝の如きは其一なるべし。地獄極楽図銅鏝羅漢図鐵鏝は三枚共同年の作にして、其欸識の一例をあぐれば次の如し。

素銅地變り形地獄図色絵高肉彫鏝銘

表 明治三十七年季夏應光村利藻君之需

裏 帝室技芸員 正六位海野勝珉 六十一

洵に右三個の鏝の如きは精緻を極めたるものにして、且つ大作なるは固より、其形状も極めて大なるものにして、廢刀後の今日之を實用になすの意なく、鏝形の扁額の如きものにして、氏渾身の根気を打込んで其傑作を後世に残されとの意なりしと推断す。兎に角此等の傑作は氏の名をして不朽ならしむるものである。

廢刀令により刀装具の制作が極めて減少した勝珉にとって、これらの仕事は金工技術の妙を尽くす絶好の機会であったに違いない。

なお、「羅漢図鏝」については、2銭の収入印紙が貼られ、「海野」印の押された下記の領収証が現存する。（個人蔵）

證 第577號

一金八百円也

但シ十二枚鐔ノ内鉄羅漢ノ鐔 彫刻料

右正ニ請取候也

明治三十七年十二月三十一日

東京本郷區駒込千駄木町五十七番地

海野勝珉 印

光村様

執事御中

また、若山泡沫、「続・夏雄の研究（その5）海野勝珉を研究する（下）」、『刀剣美術 第393号 10月号』、日本美術刀剣保存協会、1989（平成1）年、2～7頁によると、「地獄図鏝」には500円の代価が支払われ、勝珉は光村の優遇に感謝したとのことである。

作品の注文以外に、光村は、1903（明治36）年に古今装剣金工の名作をコロタイプ印刷した『鑿廻花』（全4巻）を刊行し、同好諸氏に無料頒布したが、勝珉は、その第1巻に跋を寄せている。また、勝珉の確かな鑑識眼を見込んで、刀装具蒐集の協力や箱書も依頼している。

このように金工奨励に尽力した光村は、1901（明治34）年1月に日本金工協会の名誉会員に推挙され、1904（明治37）年9月に同会より金牌を贈与された。

以上、封建時代の武士階級に代わる若松、林、光村といった囑品家の絶大な支援を得ることにより、勝珉は、己の技を練磨していった。

IV 教育者・勝珉

1 東京美術学校

勝珉は、1890（明治23）年、東京美術学校雇となり、その直後、同校教授で彫金家の加納夏雄（1828（文政11）年～1898（明治31）年）に入門した。翌年には助教授となり、1894（明治27）年、教授に昇任した。1896（明治29）年には皇室技芸員に任命され¹⁴⁾、1902（明治35）年には彫金科主任となり、亡くなるまで同校の教育に携わった。

東京美術学校における金工家教育については、横溝廣子、「近代日本における金工家教育に関する一考察－皇室技芸員と東京美術学校を中心に－」、『茨城大学五浦美術文化研究所報 第13号』、1991（平成3）年、21～46頁に詳述されている

が、本稿では特に勝珉の意向が色濃く反映されたと思われる加納没後の指導内容に注目することにする。

先年、筆者は、1912（明治45）年に東京美術学校金工科を卒業した彫金家・田中賑吉（号・芳溪、1885（明治18）年～？）¹⁵⁾ 旧蔵の美術学校時代を含む資料を発見した。

彼が同校に入学した1907（明治40）年発行の東京美術学校、『東京美術学校一覧 従明治四十年至明治四十一年』、63～64頁には、当時の金工科の授業要旨が下記の通り記されている。

金工科ニハ二ノ教室アリテ彫金鍛金ヲ学修セシム即チ彫金ハ鑿ヲ用キテ諸金属ニ彫刻シ鍛金ハ又諸金属ヲ鎚打シテ各種ノ物形ヲ作ルノ術ヲ教フル所ニシテ鞆場ヲ付設シ又傍ラ塑造ヲ学バシム特ニ課スル学科ハ製作法、工芸化学ナリ彫金ヲ教フルニハ最初ハ鑿ノ用法ヨリス即チ第一年ニアリテハ手本ヲ與ヘテ直線曲線ノ彫刻法ヨリ次デ之ヲ應用シ各自ノ考按ヲ以テ紋様等ヲ刻セシメ技倆漸ク進ムニ従ヒ片切ノ彫法、鏤金ノ手法、全彫ノ作法等ヲ教ヘ時ニ題ヲ與ヘテ彫刻ノ外新按ヲ作サシム

鍛金実習ハ其初メ銅鐵ヲ鎚打シテ简单ナル器物ヲ作ルノ法ヲ教ヘ其技漸ク進ムニ従ヒテ水滴花瓶香炉ノ類ヨリ禽獸蟲魚ヲ作ルコトヲ学修セシム卒業期ニ至リ以上ノ技術ヲ以テ卒業製作ヲナサシムルコト他科ニ同ジ

塑造ハ塑土ヲ以テ禽獸蟲魚人物等ノ原型ヲ作ルノ法ヲ学修セシムルモノニシテ別ニ設クル所ノ教室ニ於テ之ヲ課ス

絵画及図按ハ絵画ノ力ヲ養ヒ並ニ金工ニ必要ナル図按ヲ学修セシムルモノニシテ別ニ設クル教室ニ於テ之ヲ課ス

また、同書の19～25頁に掲載されている学科課程によると、豫備科並びに本科（金工科）の課目及び毎週教授時数は、以下の通りである。

豫備科

毛筆画実習 8, 木炭画実習 8, 塑造実習 8, 用器画法 8, 歴史 3, 外国語(英語または仏語) 2, 體操 2

金工科

彫金実習 第1年 12, 第2年 16, 第3年 12, 第4年 12

鋸起実習 第1年 10, 第2年 10, 第3年 8, 第4年 8

鋸金実習 第3年 8, 第4年 8

塑造実習 第1年 8

絵画及図按 第1年 4, 第2年 4, 第3年 4, 第4年 4

図按法 第2年 2

金工史及製作法 第1年 1(製作法), 第2年 1(製作法), 第4年 1(金工史)

工芸化学 第2年 2(金属及合金), 第3年 3(実験)

外国語(豫備科と同一語) 第1年 2, 第2年 2, 第3年 2, 第4年 2

體操 第1年 2, 第2年 2, 第3年 2, 第4年 2

卒業製作(彫金, 鋸起, 鋸金) 卒業期

このカリキュラムは、勝珉の存命中に変更されることなく実施されたが、ここで注目すべきは、全生徒に対して彫金と鍛金(鋸起, 鋸金)を等しく課した上に、塑造まで学修させている点である。

野村成之編、『京都美術協会雑誌 55』, 京都美術協会事務所, 1896(明治29)年に収められている「工芸志料 ○帝室技芸四 海野勝珉氏」の4頁で、勝珉は次のように述べている。

丸彫、是レ多ク置物類ニ刻スルヲ云フ、齊シク前法ニ因ルモノト雖モ、前後左右、所謂六方形ノ彫刻ニシテ至極ノ困難トナス、此技ハ鍛金法ヲ了得セサレハ製作スルヲ能ハス、鍛金ト彫刻トヲ兼ネタル名人ハ明珍ヲ推ス可クシテ、其他ニ名匠アリトモ覚ヘス、

修業時代に初代美盛及び明珍義臣から立体造形を学び、丸彫による「蘭陵王置物」や「太平楽置物」(1900(明治33)年, 宮内庁三の丸尚蔵館蔵)等の名品を生み出した勝珉は、近代の彫金家にとって写実的な立体表現能力の修得がいかに重要であるかを熟知し、本科の教程に組み入れたものと思われる。

さらに同書の7頁では、美術学校の生徒に対して、下記のように日本古来の彫金諸技法を会得することの必要性を説いている。

余ハ明治維新ノ際、非常ノ辛酸ヲ嘗タリト雖モ、其艱苦ニ處シテ幸ニ鑽ヲ捨サリシ為メニ今美術学校ノ教授ノ任ヲ帯ルノ榮譽アリ、故ニ生徒ニ教ユルニハ可及的古法ヲ習得セシメ、卒業ノ後ハ其彫刻法ヲ基本トシテ百般ノ彫金ニ應用シ、新創ノ名作ヲ出シテ斯業ノ面目ヲ一洗セシムト欲ス、

この持論を実践すべく、東京美術学校では課題として彫金標本の模刻が行われたが、先述の田中旧蔵資料の中に、同氏が銅板に刻んだ図1～図9の手板が存在する¹⁶⁾。



図1 兜, 劍(毛彫(直線), 5.7cm×7.5cm)



図2 笹 (毛彫 (曲線), 6.0cm×7.6cm)



図3 鶴 (片切彫, 6.1cm×7.5cm)



図4 花菱, 唐草 (平象嵌, 6.0cm×9.2cm)



図5 雷紋 (鈔出彫, 平象嵌, 6.0cm×9.3cm)



図6 青海波 (肉彫, 6.1cm×9.2cm)



図7 波 (肉彫, 6.0cm×9.1cm)



図8 雲（肉彫，6.1cm×9.2cm）



図9 寒山（薄肉打出，片切彫，毛彫，9.0cm×6.1cm）



図10 同（手本（拓本），9.1cm×6.1cm）

これらの内，図5～図8の元になる手本は，明治20年代に銅板で製造され，図9の手本（図10）は，1900（明治33）年に勝珉によって黒味銅で制作された。（手本は，共に東京芸術大学大学美術館の所蔵である。）それぞれの模刻を手本と比較すると，田中の作品は原作に忠実であり，基礎を徹底的に叩き込まれたことが分かる。

以上のように，東京美術学校金工科の生徒は，教程に従って段階的に彫金諸技法や鍛金，塑造による立体表現等を学んだ上で，最終的に各自の主題を設定し，卒業制作に臨んだ。

ところで勝珉は，生徒の更なる学修用として作製した彫金標本11枚（鶴二浪，魚狗，雀，児犬，牡丹，鷺，布袋，山水，錦魚，秋草，鮎）を，1912（明治45）年4月6日に東京美術学校へ寄附した¹⁷⁾。彼が後進への技の継承にいかに心血を注いだかを如実に示す行為である。

2 私工房

先般，筆者が確認した五嶋正一（号・正珉，薫洲叟，京都市右京区住）旧蔵，『海野勝珉師作品集』（個人蔵）には，下記の五嶋直筆の原稿が添えられ，私工房の様子を窺うことができる。

参考之為記して置く。

私か東京に行って不思議な縁で入門した有難い思ひ出を後世に残す参考の為め忘れぬうちに記して置く。

（中略）

兄弟子が十何人か？十年から居る人、又卒業してから通って仕事をして給料を貰って居られる方も四五人居られた。今迄聞いた事も、見たことも無い仕事か倉に沢山有った銀銅等二十数木、外に何が有るか？相像もつかぬ、絵本もいろいろ有る 大家だなァ！と驚くばかり、彫り物師でも此の様な人が居られるのか、京都から来て亨様に世話になったし、万事好都合よく出来た。思ひ切って出て来たおかげだと感謝す。

(中略)

其の後は庭の植木鉢の水やり、植かえ、など、職人が来てする仕事だったが、変りか出来たので用事が無くなって来なくなった。

その故が植木の精がよく葉の色も生々として位置の変った物は又新しく買入れたかと思ふ位変化して楽しくなって来た、先生も喜んで、いつとはなしに庭に下りて見て廻られる様になり気に入ったのは座敷に置いて仕事をした一ぷくの時に嬉しそうな顔をして一杯して居られた。

以来傍を離れる時か少なくなって昼寝をする時も、「こゝと」「こゝを」どうしておいて呉れと下彫りや磨きをやらされた。他の弟子達は中々出来ない仕事で、彫り上ったのは磨いて肉取りをして持って来る、若先生¹⁸⁾かどこかに納められるのだが其の前に一枚か二枚変化した物をぬいて下さったのが此の本に納めてある、まだ他にあったか「あちこち」住居を変つたので少なくなったので整理したのが此の帖である

記念のためにまとめておいて説明を記して参考のために保存して置く。

昭和六十一年八月十日、

五嶋正一 [正珉]

九十四歳

印(3種)

五嶋が本所区番場町の門を叩いた時、勝珉は既に還暦を過ぎていたことから、これは明治30年代後半以降の話である。当時の工房には、住み込みと通いを合わせて15人以上が従事していた。東京美術学校教授、帝室技芸員、諸展覧会審査員等の要職にある勝珉は多忙を極めており、門弟の中には、作品の下彫りや研磨を手伝う者もいた。また、内弟子は盆栽の手入れ等の雑事もこなしていた。

卒寿を過ぎた五嶋は、修業時代に師から譲り受けた墨摺が、自身の死後に散逸することを危惧し、この貼込帳を作成した。また附録の文章は、

入門の経緯、工房での思い出、拓本の来歴等を記録に残すために書かれたもので、文面からは、五嶋の勝珉に対する尊敬と感謝の念が伝わってくる¹⁹⁾。

なお、1894(明治27)年2月から1902(明治35)年1月まで勝珉に師事した東京市住の彫金家・宇野正作(号・先珉、1879(明治12)年~?)も五嶋と同様に勝珉作品の墨摺や下絵を帖に仕立てた『東華齊帖』(全4冊、個人蔵)を残している。

勝珉自身、敬愛する作家の作品、下絵、拓本等を多数蒐集し²⁰⁾、研鑽を積んでいたため、弟子にも自らの画稿や墨摺を修業に役立ててもらおうと分け与えたものと思われる。中には東京美術学校で使用された彫金標本の拓本も含まれており、門人は、これらを模刻したり、構図の参考にしたと考えられる。勝珉の弟子に対する深い愛情が感じられる。

3 技法内容

勝珉が教え子達に伝授した技法の詳細については、彼に師事した水野信常(号・月洲)が著し、勝珉と2代美盛が校閲した『色彩彫金術 全』、盛明舎支店、1914(大正3)年にまとめられている。水野は、遠州掛川の生まれで、幼少より藩校で漢学を学び、18歳で勝珉に入門する²¹⁾。1898(明治31)年、勝珉の抜擢で富山県立工芸学校教諭となるが、失明により制作を断念し、本書刊行の時点では既に退職している。

これは、従来秘伝とされてきた金属着色法を広く参考に資する目的で、口述筆記により上梓されたものである。内容は、第1章 彫金術に要する器具、第2章 金属彫刻の方式、第3章 焼入法、第4章 脂の製法、第5章 合金法、第6章 色絵金の延方、第7章 色絵法、第8章 鑢の製法、第9章 腐蝕法、第10章 着色法、第11章 鑄金着色法、第12章 分析法、第13章 鍍金法と多岐に亘っている。制作や後進の育成が不可能となりながらも、勝珉から学んだ技術を後世に

伝えなければならないという水野の強い決意が察せられる。中には現在ではほとんど行われていない技法もあり、大変貴重な記録である。この本から、改めて勝珉は多様な金属を駆使し、豊かな色彩を追究していたことが頷ける。

V まとめ

勝珉が大成した主な理由は、①卓抜した技術力、②多大な努力、③進取の気性、④豊かな人間性であるが、人生の重大な転機に彼を励まし、支えた人々が存在したことも大きな要因であることが、本研究で確認された。彼は、人柄と才能を愛する人々の支援を受けることにより、幾多の困難を克服し、前進し続けることができた。

また今回は、勝珉の後進育成についても調査した。教育課程に基づく東京美術学校と内弟子制の私工房では指導の仕方は異なるが、共に手板の模刻を中心とした彫法の修練や合金法、金属着色法等の伝授により、日本の伝統的な技巧の継承と発展を目指した。

以上の研究を通して、改めて彼は、国家や文化が180度転換した維新の断絶を懸命に乗り越え、近代を突き進んだ人物であると実感した。己の仕事が社会に貢献できると確信し、先見の明を持って奮闘する彼の姿は、現代の人々にとって時代こそ異なるものの、力強く生きるための多くの示唆を与えると考える。

なお、今後の研究としては、作品の真贋を見分ける際に必要な落款を集成すると共に、門人の作品を分析することにより、彼の技がどのように継承されたかについて探究する予定である。

注

- 1) 拙稿, 「水戸彫・海野家の研究(4) - 帝室技芸員・海野勝珉① -」, 『大学美術教育学会誌 43号』, 2011(平成23)年, 31~38頁
- 2) 初代美盛を指す。
- 3) 東京府勸業課編, 『東京名工鑑』, 有鄰堂, 1879(明治12)年, 174頁

- 4) 2代美盛, 「故帝室技芸員海野勝珉先生」, 6頁
- 5) 「植梅」の苗字は浅井である。
- 6) 同誌, 1870(明治3)年秋号には、勝珉の親族である「彫工 外神田 海野盛壽」と実兄の「彫工 コマ込タンゴ坂 青龍軒義政」も掲載されている。
- 7) 勝珉の命日は、10月8日である。
- 8) 若山泡沫, 「続・夏雄の研究(その9) 海野美盛初・二代と塚田秀鏡」, 『刀剣美術 第397号 2月号』, 日本美術刀剣保存協会, 1990(平成2)年, 8~11頁によると、横綱・栃木山(出羽ノ海部屋, 1892(明治25)年~1959(昭和34)年)の化粧まわし(相撲博物館蔵)の四分一磨地の扇面形に竜を片切彫した金具には、勝珉と2代美盛の銘が刻まれているとのことである。
- 9) 彼が勝珉に依頼した代表作は、「色紙貼交屏風」(加納夏雄等との共作, 1894(明治27)年, 宮内庁三の丸尚蔵館蔵)で、勝珉は瀧和亭(1830(天保1)年~1901(明治34)年)の原画による「雲中鹿」及び久保田米僊(1852(嘉永5)年~1906(明治39)年)の原画による「君が代の歌意」を手掛けた。
- 10) 彼が委嘱した代表作は、「猩々図花瓶」(1対, 1909(明治42)年, 宮内庁三の丸尚蔵館蔵)である。
- 11) 勝珉は、制作費用の捻出に苦辛したようであり、野村成之編, 『京都美術協会雑誌 55』, 京都美術協会事務所, 1896(明治29)年の「工芸志料 ○帝室技芸四 海野勝珉氏」(1~7頁)には、「之ヲ出品セムトスルモ得ル所ノ資金正ニ空シ、資金既ニ材料蒐集ノ為ニ消費ス、又以テ刀ヲ続クルノ法ナシ、然レトモ熱誠溢レテ他ヲ顧ル違ナク、自己ノ家財什器ヲ売却シ、之ヲ以テ辛クモ不足ヲ補ヒ、一家困窮、殆ト飢餓ニ迫ル、日夜刻苦精励シ、終ニ三年ヲ経テ意ノ如ク大成ス、」と記されている。
- 12) 第三回内国勸業博覧会事務局, 『明治廿三年

- 第三回内国勸業博覧会審査報告 第二部 美術』, 1891 (明治24) 年の79頁には, 「然ルニ此像ハ體肢齊シク鑲工ヲ施サズシテ全形ヲ鋳出セリ、其術至難ニシテ近代ノ彫工之ヲ為ス者アラス、勝珉氏勉強シテ此工ヲ成シ、態度恰好其眞ヲ失ハス、」と評価されている。
- 13) 川口陟, 『鐔大観』, 南人社, 1935 (昭和10) 年の394～409頁に, 光村の求めに応じて制作された鐔の一部が掲載されている。
- 14) 野村成之編, 『京都美術協会雑誌 50』, 京都美術協会事務所, 1896 (明治29) 年の「工芸志料 ○新任帝室技芸員」(4～7頁)には, 帝国博物館総長男爵・九鬼隆一による同年6月30日付の新任帝室技芸員に対する命令書が掲載されている。その第一には, 「帝室技芸員は本邦美術を奨励する為古を徴し今を稽へ工芸技術を練磨し後進を誘導するを旨とすべし」と書かれており, 後進の育成が重要な任務であることが示されている。
- 15) 田中の東京美術学校卒業制作, 「金剛力士」(1912 (明治45) 年) は, 同期生・根尾謙兒(1886 (明治19) 年～?) 作, 「密迹力士」との組作品であり, 共に東京芸術大学大学美術館の所蔵である。
- 16) 田中が東京美術学校時代に取り組んだ課題としては, 彫金手板の模刻以外に植物画や花瓶, 香炉, 額等の墨筆下絵が現存する。「富士山」, 「松原」, 「波に千鳥」といった日本の伝統的な文様のみならず, 当時の西洋におけるデザインの新様式であるアール・ヌーヴォーによる「麦」や「孔雀の羽根」をモチーフとした図案も残されている。
- 17) この寄贈により, 勝珉は賞勲局より銀盃を下賜された。
- 18) 勝珉の四男・清 (重要無形文化財保持者, 1884 (明治17) 年～1956 (昭和31) 年) を指す。
- 19) 勝珉工房の様子については, 若山, 「続・夏雄の研究 (その4) 海野勝珉を研究する(上)」, 『刀剣美術 第392号 9月号』, 日本美術刀剣保存協会, 1989 (平成1) 年, 12～15頁に, 勝珉の門人・向井勝明 (東京府下向島小梅村住) の談話が紹介されている。
- 20) 東京芸術大学大学美術館蔵, 「海野家資料」中には, 中島春英作の小道具下絵や横谷宗珉(1670 (寛文10) 年～1733 (享保18) 年), 土屋安親(1670 (寛文10) 年～1744 (延享1) 年), 奈良乗意(1701 (元禄14) 年～1761 (宝暦11) 年), 一宮長常(1722 (享保7) 年～1786 (天明6) 年), 後藤一乗(1791 (寛政3) 年～1876 (明治9) 年) 等の小道具肉摺貼込が存在する。
- 21) 若山猛 (= 泡沫), 『刀装金工事典』, 雄山閣出版, 1996 (平成8) 年, 118頁によると, 彼は東京美術学校卒となっているが, 東京美術学校, 『東京美術学校一覽 従大正二年至大正三年』, 1914 (大正3) 年中の「卒業生姓名」(118～195頁)には掲載されていない。